

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
冒	ボウ おかす おおう 常①								伝空海
冂	ジョウ 常①								王勃詩序
宀									
写	シャ うつす うる 教3常①								杜家立成
寫	②								杜家立成
寫	②								
冠	カン かんむり 常①								璣玉集
									璣玉集
冥	メイ ミョウ 新①								王勃詩序
									王勃詩序

【冂】多くの場合、漢和字典では「冂」の部に掲載されているが、書道字典では「冂」の部に「冂」の字体で掲載されている。説文篆文に従えば「冂」になるはず。五経文字には「冂」の部に「冂」の字体のみ掲載され、しかも「冂」との違いについて説明されている。康熙字典には「冂」の部に「冂」が

あり、「冂と同じ」とある。「冂」の部にも「冂」があるが、そこには「冂」についての記述はない。漱石は「冂」と「冂」の両方を書いている。畏るべし漱石。
【写】本来は「冂」の字らしい。「冂」としたり、「冂」を「冂」としたり、「冂」の「冂」を「冂」としたり、「冂」の最終画

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												冒 現代中国
												冂 現代中国
												写 現代中国
												寫 江戸五経(並)
												冠 江戸五経(俗) 現代中国
												冥 干祿<俗> 現代中国

を横に伸ばして「冂」っぽくなる字体の出現は南北朝期から。当用漢字の字体は手書きでは江戸期から使われている。
【冠】「元」の最終画が右に伸びて「冂」のようなのは唐代に入る頃から。南北朝期までは「元」の最終画は短くはねていた。それが「冂」に間違われ、さらに「冂」に誤つ

た字体がある。日本上代には「冂」を「冂」とする字体があるが、江戸期の版本には見えない。
【冥】2011年に人名用漢字から常用漢字に出世した字。隸書の時代に「冂」の他に「冂」が出現。南北朝期に「冂」が出現。説文篆文に倣えば「冂」が正字体。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
富	フ フとみ とむ 人①								法華義疏
富	フ フとみ とむ 教5常①								大聖武
富									大聖武
冬	トウ ふゆ 教2常①								王勃詩序
冬									
冴	コ コ え さえる 人①								
冶	ヤ いる とける なまめかしい 新①								王勃詩序
冷	レイ さます・まめ る・つめたい ひえる・ひや ひやかす・ひ やす・すずし い 教4常①								王勃詩序
冷									
准	ジュン なぞらえる 常①								杜家立成
准									
準	ジュン なぞらえる のり ひとしい 教5常①								鄧普指歸
凄	セイ すごむ まむい すこい すまじい 新①								江戸五経
凄									

【富】干禄字書ではく俗)となっている。正字は「富」。漢代は「穴カムリ」とする字体があった。

【冴】使用例がみつからない。書道字典に親字さえない。漢和字典には「冴」の異体字とある。

【冶】2011年に人名用漢字から常用漢字に変更になった。

【冷】干禄字書と五経文字の字体は点の位置が異なる。拓本の江戸版本と五経文字は最終画が異なる。

【准】「准」は説文所無。篆書には「準」を用いる。干禄字書では「準」をく正)、「准」をく通)としている。江戸期にはサンズイに作ることも多い。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												富 江戸千塚(俗) 現代中国
												富 現代中国
												冬 康熙古文 現代中国
												冴 現代中国
												冶 現代中国
												冷 江戸五経 現代中国
												准 干禄<通> 現代中国
												凄 現代中国

【凄】2011年に人名用漢字から常用漢字になった。サンズイの「凄」と異体字。説文にはサンズイの「凄」が載っている。五経文字もサンズイの「凄」を撰っている。日本ではニスイの「凄」。現代中国もニスイの「凄」を撰っている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
凋	チョウ しほむ		凋	凋			凋	凋	凋
①			説文篆文	張表碑			道因法師碑	干祿字書	性靈集
凍	トウ こおる こごえる		凍	凍			凍	凍	凍
①			説文篆文	武威漢簡			唐雲墓誌	干祿字書	杜家立成
凌	リョウ しのぐ		凌	凌		凌	凌	凌	凌
①			説文篆文			書譜	東方朔畫贊	泉男生墓誌	干祿字書
凝	ギョウ こらす こる		凝	凝		凝	凝	凝	凝
①			説文篆文			十七帖	集字聖教序	高慶碑	孔子廟堂碑
凡	ボン ハン およそ すべて	凡	凡	凡		凡	凡	凡	凡
①		甲骨	散氏盤	睡虎地秦簡	説文篆文	馬王堆	居延漢簡	書譜	集字聖教序
処	ショ おくる ところ	処	処	処		処	処	処	処
①		金文	石鼓文	説文篆文	馬王堆	史晨後碑	十七帖	集字聖教序	中岳嵩高靈廟碑
凧	たこ		凧	凧		凧	凧	凧	凧
①			郭店楚簡	馬王堆	史晨後碑	天柱山路	凡	凡	凡

【凍】説文篆文は「冫」だが漢代の武威漢簡、北魏の唐雲墓誌は「冫」に従っており、干祿字書も「冫」を〈正〉とし、「冫」を〈俗〉とする。九經字様では説文篆文に従って「冫」の字体を載せている。我が国では「冫」に従った字体が標準。
【凌】通用体では旁を「麦」とすることが多く、文部省の漢字

整理案でもこの字体が検討されたことがあった。偏を、誤って「冫」にすることがあるが、「凌」と「凌」は別字。
【凝】もと「氷」の俗体だといふ。
【処】説文では「処」を親字として掲げ、「處」を或体(異体字)としている。説文に従えば「処」は「處」の略字ではな

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
凋	凋	凋	凋									凋
枯葉本朗詠	開化一寸用文	冫 8										凋
凋	凋	凋	凋									凋
枯葉本朗詠	節用	冫 8										凋
凍	凍	凍	凍									凍
枯葉本朗詠	節用	冫 8										凍
凍	凍	凍	凍									凍
枯葉本朗詠	節用	冫 8										凍
凌	凌	凌	凌	凌	凌	凌	凌					凌
農家用文章大全	冫 8				陸軍							凌
凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝	凝					凝
元暦萬葉④	再板農業全書	冫 14										凝
凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡	凡
												凡
												凡
												凡
処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処
元暦萬葉①	節用	几 3										処
処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処
黒流本朗詠	節用	几 5										処
凧	凧	凧	凧	凧	凧	凧	凧	凧	凧	凧	凧	凧
黒流本朗詠	書札節用文章											凧

い。金文にも「処」と思われる字体がある。金文の「処」の左側は「人」だろう。「処」「處」それぞれに正字体と通用体がある。馬王堆の字体が「処」の通用体。五經文字で〈俗〉としている字体が「處」の通用体。漱石は「処」「處」両方の字体を使うが、「処」の使用は「ところ」と訓読みする場合の

1度だけ。音読み及び熟語での使用は「處」を使う。
※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
凧	なぎ なく 人①								
鳳	オウ 人②							鳳 江戸干祿	
凱	ガイ 人①			凱	凱	凱	凱 凱	凱	凱 王勃詩序
							凱 凱		
豈	ガイ キ あに ②		豈 豈	豈	豈	豈	豈 豈 豈 豈	豈 豈 豈 豈	豈 王勃詩序
							豈 豈		
愷	ガイ たのしむ やすい やわらく ③		愷 愷	愷	愷	愷	愷	愷	愷 元暉誌
凶	キョウ わるい 常①		凶 凶 凶	凶 凶	凶 凶	凶	凶 凶 凶 凶	凶 凶 凶 凶	凶 性靈集
凹	オウ くぼみ くぼむ 常①								
出	シュツ スイ だす でる 教1常①	出 出 出	出 出 出	出 出 出	出 出 出	出 出 出	出 出 出 出 出 出 出	出 出 出 出 出 出 出	出 王勃詩序
		出 出 出		出 出			出 出 出		
		出		出 出			出		
			出				出		
凸	トツ 常①								

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
			凧				凧					国字
			鳳 鳳									鳳 現代中国
			凱 凱				凱					凱 現代中国
			豈 豈				豈					豈 現代中国
			愷									愷 現代中国
			凶 凶 凶 凶				凶 凶 凶		凶	兇	凶	凶 江戸干祿(通) 現代中国
			凹 凹 凹				凹					凹 唐懷素 現代中国
			出 出 出 出 出 出 出				出 出 出 出		出 出 出	出	出	出 江戸九経(説) 現代中国
			出									
			凸 凸				凸					凸 現代中国

【凱】一部の書道字典には「本は豈」「豈の俗字」などの記述がある。
 【凹】ほとんどの書道字典には不掲載だが、唯一『五體字類』第三版に「懷素」が掲載されている。
 【出】「山」が2つと解する字体は南北朝期に出現するが、こ

の字体は九経字様では「訛」としている。『陸軍幼年学校用字便覧』では「山」の下に「々」を配する字体が掲載されているが、実際の使用例は未見。「山」の下に点を2つ書く例は近世の文書に使用例がある。
 【凸】ほとんどの書道字典には不掲載だが、唯一『五體字類』

第三版に「宋人」の書として1例掲載されているが、出典が確定できないので本書には載せなかった。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)		説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
函	カン はこ									畫圖説文
函	②									伊都内親王願文
刀	トウ かたな									王勃詩序
刃	ジン は やいば									法隆寺献物帳
刃	②									
刃										上孫家筆蹟
刈	ガイ かり									
刈	①									
刈	②									
切	セツ サイ きる きる									王勃詩序
										九經字樣 王勃詩序

【函】説文篆文には2種の字体がある。1つは「マ+口+彡」、もう1つは「肉+今」の字体。「マ+口+彡」と「函」は字体が一致しない。白川静説では「マ+口+彡」と「函」は元々は別字で、発音が同じために混用されたとする。「肉+今」の字体は馬王堆にある。日本の人名用漢字の字体は康熙字典に

由来し、現代中国の字体は唐代の楷書に由来するようだ。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												函 現代中国
												刀 現代中国
												刃 現代中国
												刈 現代中国
												刈 現代中国
												刈 現代中国
												切 干祿<通> 現代中国

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。